丸森・小母沢遺跡発掘調査報告書

1975

富士見町教育委員会

丸森・小母沢遺跡発掘調査報告書

中央本線信濃境・富士見間線路増設工事に伴う緊急発掘調査

序……1

調査の概要……2

丸森遺跡……3

小母沢遺跡……8

写真図版

1 9 7 5

富士見町教育委員会

国鉄岐阜工事局

序

この報告書は，中央本線信濃境・富士見間線路増設工事の施行に伴って，国鉄岐阜工事局と富士見町教育委員会の間で調査契約をとりかわし，それにもとづいて行った発掘調査の結果をまとめたものである。

契約では当初，昭和50年3月末日までにすべての作業を終了する予定であったが，国鉄の用地買収作業の関係で土地所有者との調停が出来ず実際の発掘調査は用地買収の完了を待って一年おくれとなってしまった。

発掘調査の実務は，調査団を編成して行なったが，発掘人夫は地元烏帽子区の経験者を主体としたため作業は予想以上に捗った。

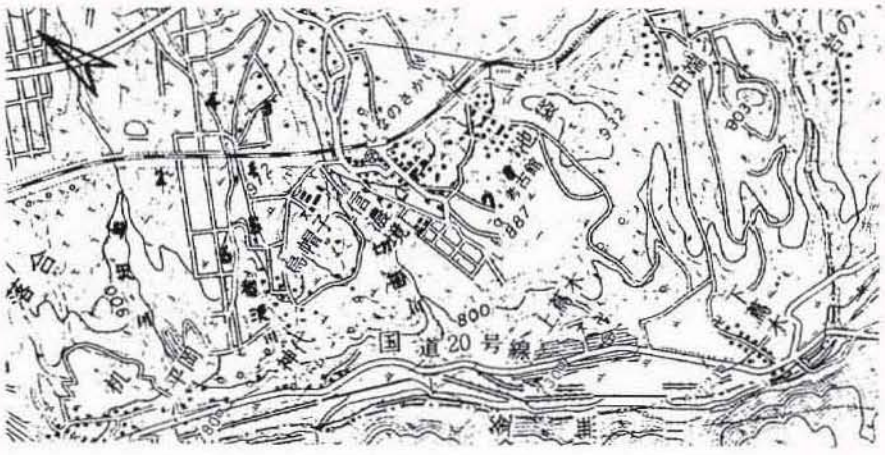
報文をまとめるにあたっては，発掘担当者の武藤雄六が遺物と調査資料の整理に当り，小林公明が作図と本文の執筆を担当した。付近の遺跡発見の遺物については作図・解説とも発見者の平出一治氏に依頼した。また，発掘調査を二遺跡同時に行なったため，本来ならば報告書も遺跡ごとに分けて作成すべきであるが体裁は一括し内容は遺跡ごとに分割執筆する方法をとることにした。

報告書の完成にあたり，この発掘調査に関係した各位の御支援にたいし，ここに記して厚く御礼申上げる次第である。

昭和50年11月1日

富士見町教育委員会

教育長　小林繁治



1．丸森　2．小毋沢　3．藤内　4．九兵衛尾根
5．居平　6．梨木原　7．曽利　8．井戸尻

第1図　遺跡付近図（1：50,000）

調 査 の 概 要

丸森遺跡は，10余年前の国鉄通信ケーブル埋設工事の際，武藤信夫氏によって縄文時代中期最末の埋甕が発見され住居址の埋没が確認されていた。そこで，今回，国鉄の線増工事が計画されるに及び調査の対象となったのである。発掘予定地は山林で富士見町落　合3764番地10・16・17と4410番地36・37のうち約200m²を発掘の対象範囲とした。

小母沢遺跡は，縄文時代前期末および中期並に平安時代後期の遺物散布地であり，現状は普通畑および桑園と一部は原野になっている。発掘予定地は富士見町落合4153番地12・10・8のうち約180m²の範囲について調査を実施した。

発掘は，富士見町教育委員会が編成した調査団によって，昭和50年8月27日～9月4日までを主調査期間とし，地形測量，細部の確認調査の終了したのは10月12日であった。

調査関係者名簿

1．調査委員会

委員長　浜　茂敏…教育委員長

委員には教育委員・文化財審議委員を委嘱した。

2．調　査　団

団長　小林繁治…教育長　副団長　小林　勲…保存会長

担当者　武藤雄六・小林公明……井戸尻考古館

調査員　小平辰夫・小林　泰・平出一治……長野県考古学会員

長崎元広・武居幸重…… 〃

調査補助員　折井　敦・五味一郎……明治大学生

3．協　力　員

保存会の役員を委嘱した。

4．発掘参加者

小林益美・小林百合・小林道子・小林まさ子・小林せつ・小林のり子・小林きみ・小平和子・斉藤みとし・浜まち子・浜由利子・島田哲男・清陵高校地歴部員（この他，地形測量・水洗等に多くの人々の参加があった。）

5．事　務　局

小池定義・平出一江

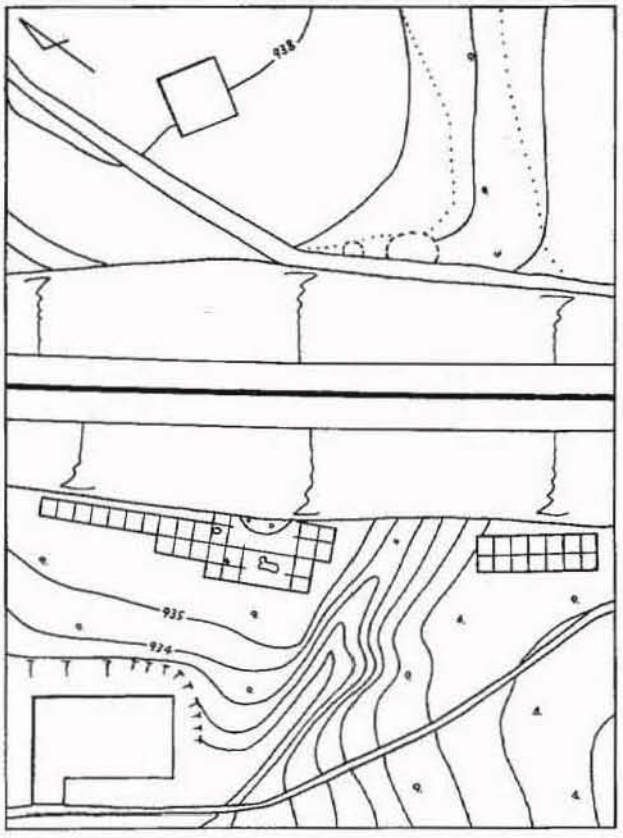
丸　森　遺　跡

1 位　　置

切掛川の一瞬吸込まれるような深々とした相貌を見ながら信濃境駅を出た中央東線が，台地を掘割った中を走り抜けて狢沢川の浅い沢べりにかかろうとするところが丸森遺跡である。ここは，狢沢川の東縁に沿って発達した標高940m前後の帯状台地が，古八ガ岳期の鼻戸屋・池袋溶岩の噴出によって形成された丸森山（972m）の円丘体に接する地点である。

狢沢川の両縁台地には縄文中期の集落遺跡が帯のように展開している。ここから人家の点在する畑地を斜めに横切って北東400mに藤内遺跡を，狢沢を隔てた北300mには九兵衛尾根遺跡を望み，丸森を西南側にまわれば居平遺跡がある。

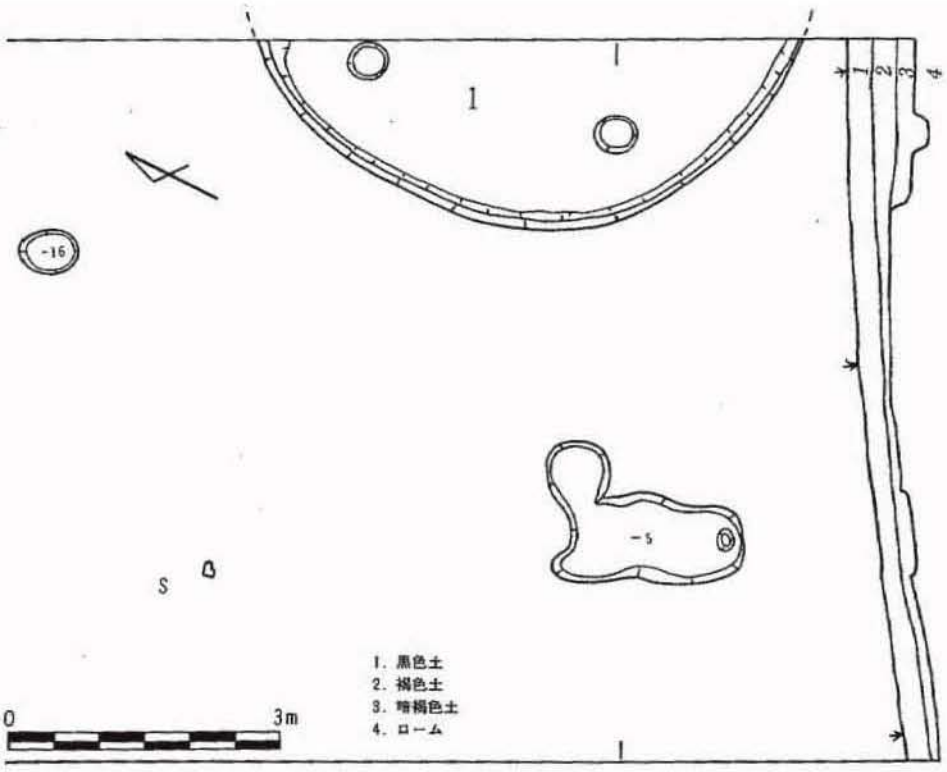
それらに比べて，南面を丸森山によって遮られ，東南側に向って緩傾斜するこの場所は手狭であって，遺跡の立地として恵まれているとはいい難い。鉄道用地をふくむ70m×40mの範囲の小規模な遺跡と推察される。今回の発掘地点はそのうち，尾根が西南側へ傾斜して消滅するあたりで，遺跡の末端部に相当するところである。



第2図　丸森遺跡（1：1000）

2　発掘の経過と遺構

鉄道の開通以前に使用されていた用水汐の跡をはさんでグリッドを設定して発掘を行った。まず，汐の南側は丸森の裾端であるため腐蝕土の堆積がやや厚く，黒色土層40cm・褐色土層30cmでローム面に達し，精査したが遺物・遺構は全く検出されなかった。北



第３図　丸森遺跡第１号住居址・土坑

側は，黒色土層 30 cm，褐色土層 15cm 前後で軟質ロームに移り，遺物が散見された。しかし遺構は，鉄道の掘割際に辛うじて残された住居址の一部と，その西側に浅い土坑を認めただけにとどまった。

住居址は，すでに通信ケーブル埋設工事のとき南隅から埋甕が発見されその存在が確認されていたので，これを第１号址とする。遺構は軟質なローム面下 25cm に構築され，径 6m の円形プランを示し，主柱は４ないし５本であったと思われる。床面はやや軟弱で不明瞭ながら周溝がまわり柱穴は浅い。南の柱穴内には拳大の炭化材が遺存していたが，ボロボロに細片化しており取上げることは不可能だった。また北～北東の大部分と炉址などの遺構をはじめ遺物の最も多い部分は，鉄道の掘割りによって破壊されてしまっていた。遺物は，堆土中の土器片１点と打石斧２本および凹石１個であった。

土坑は２つとも浅く，遺物は認められなかった。その他には褐色土層の下位に置かれた安山岩の自然礫１個が見出されたのみである。これらと１号址を結ぶ間からは僅かながら土器片が見出されたが，それらは１号址と全く同時期に属するものであった。したがって土坑をふくむ一帯は同期にかかわる屋外施設として差支えない。なお，発掘区全体にわたって，褐色土層下位から軟質なロームに移る間では，芥子粒のような炭が疎らに確認された。当時の生活面を示す痕跡としておさえられるだろう。

3 遺　　物

遺物は，埋甕1，土器片10点，石器5点，硬砂岩のチップ1点であった。

1号址の埋甕（4図11）は，上胴部～口縁部の大半を欠くが器高45cm・口径34cmを計り，器底が砲弾形に近い典型的な曽利Ⅴ式深鉢である。胎土は粗く酸化鉄の粒を含み，器壁は荒れているが焼成は硬い。2本の沈線による口縁横帯文と懸垂文で器面を7分割して綾杉状のハの字文を無雑作に施文している。底部には不鮮明な網代痕がみられる。胴部は煤の付着が著しく，内壁の器底近くには食物の炭化滓が厚く残着している。このように埋甕は，かなり烈しく使用された煮沸用器が機能転化する場合が多いのである。

土器片は，1号址出土の3以外は同址の南～西の近傍グリッドからの出土である。1と2は同一個体かとも思われる口縁部，3～7はハの字文の胴部の破片，8，9は縄文の地文を有し，10は網代痕をもつ底部である。これらはいずれも淡褐色を呈して胎土は粗く酸化鉄の粒を含む共通点があり，1号址発見の埋甕と同じ曽利Ⅴ式土器片である。

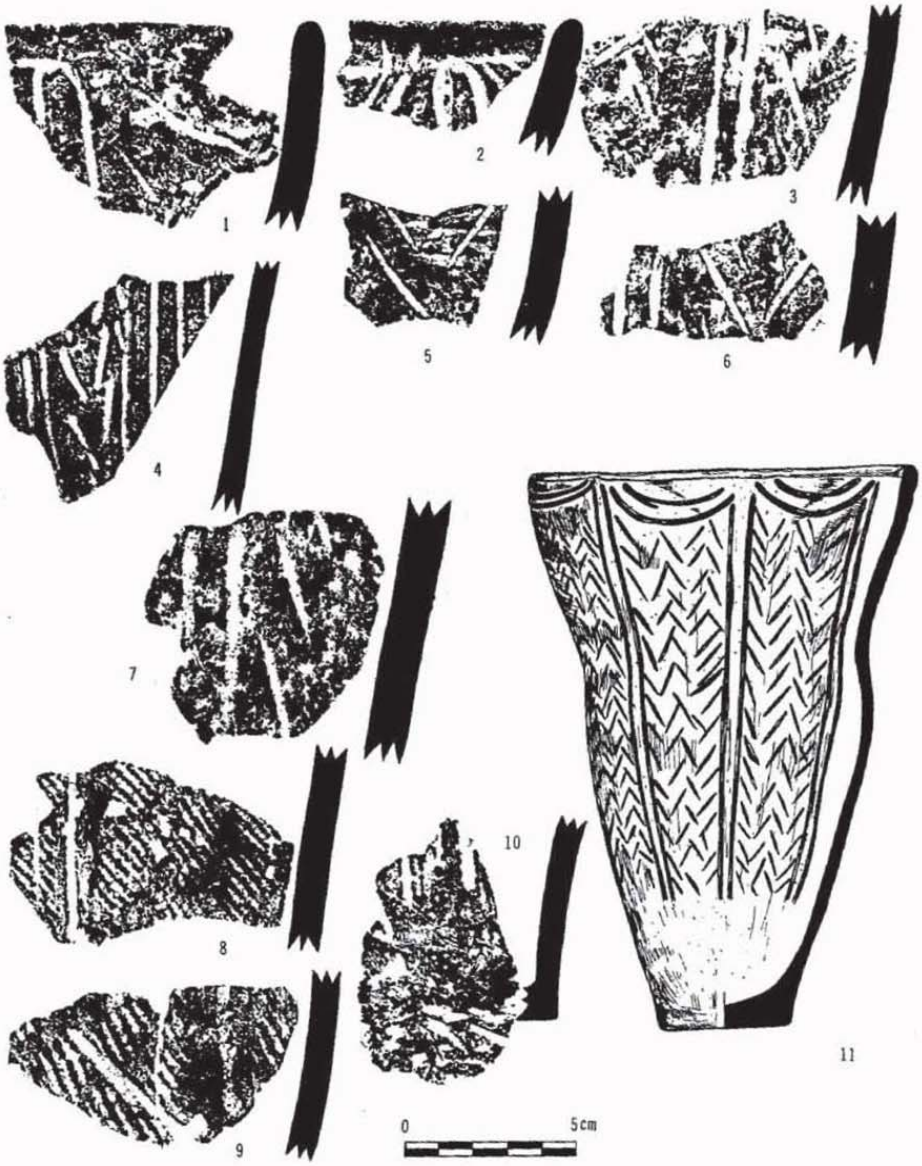
石器のうち1～3は1号址，4，5は南側の屋外から出土した。凹石1は粗く多孔質な輝石安山岩製であるが，凹穴は認められない。打石斧2は表面が白く風化して微かに腹背が湾曲している。石質は砂岩ホルンフェルスである。3は硬砂岩製の打石斧であるが上半部を欠く。4は原石の表皮を残した分厚い粘板岩の石片であり，片面から打撃を加えてフラットな打欠き面に簡単な剝離を施している。石器に加工するには不適当なため中途で放棄された石片かもしれない。5はカマボコ形を呈し，底辺に刃をもついわゆる横刃型石器で粘板岩の薄い石片を用いている。

4 結　　び

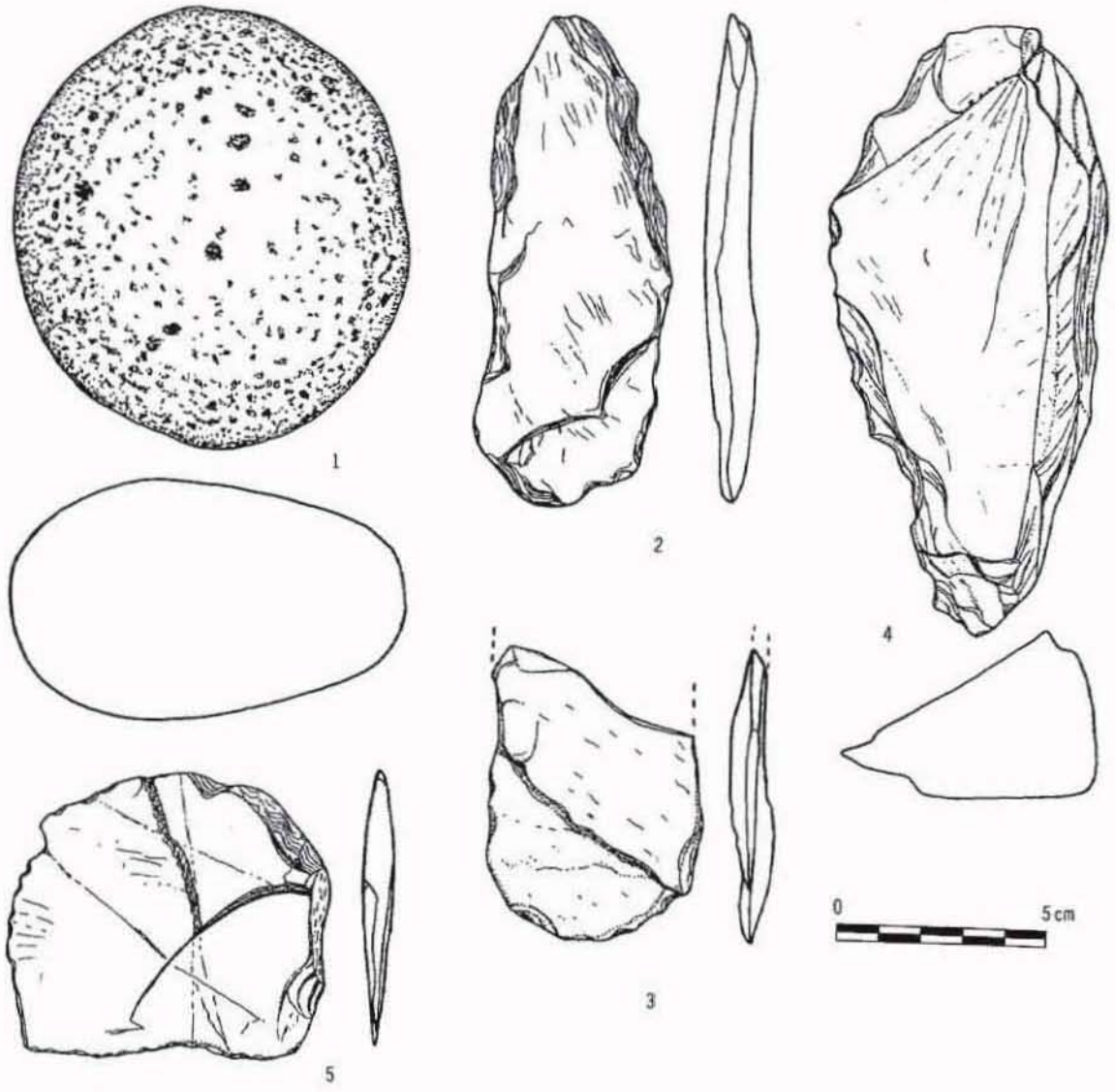
発掘の対象となった個所は，地形的に遺跡の西南端に当る。一方，鉄道を隔てた東側の用地境に沿う道路には，住居址と土坑の断面が観察される。しかし北側の畑では遺物の散布はみられない。こうしたことから丸森遺跡は，台地の南寄りに3～5軒ていどが並ぶ中期最末の集落遺跡と推定され，すでに明治の鉄道開削によってその主体部は消失したものと判断された。

このように今回の調査では集落遺跡の最末端の調査になってしまったが，たいていの調査では試ることのできない集落の末端の様相を知ることができたことに大きな意義を認めなければならない。

（小林公明）



第4図　丸森遺跡出土土器拓影・実測図（実測図はS＝1/6）



第5図　丸森遺跡出土石器実測図

小母沢遺跡

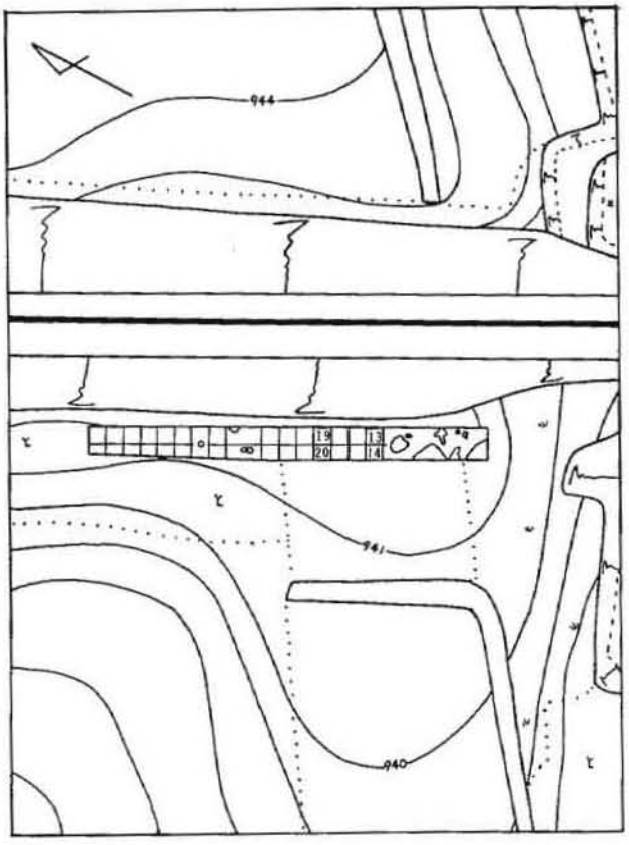
1 位　　置

丸森遺跡を上目に一瞥して狢沢川を渡った中央東線が，田圃のなかをつっきり再び深い掘割りに入るところが，小母沢遺跡である。鉄道が横切るあたり，母沢川東縁の尾根の東側は，地籍名を「底潜り」と称する低湿地帯となっているが，湿地の各所からの湧水を集めて流下する小沢が小母沢である。この東側には，鉄道線路によって切られている個所を付根として南西にのびる標高945m～935mの半島状の顕著な尾根がある。さらにそれは先端で一度縊れて「梨の木」と呼ばれる尾根に対峙している。これらの尾根筋から小母沢にかけては，縄文前～中期，平安時代の遺物が点々と発見されているので，この付近の遺跡に小母沢および梨の木の名称を冠している。尾根筋から小母沢にかけては畑と一部原野であり，東南面は水田地帯となっているが，構造改善事業によって景観は一変し，当該尾根の斜面も削取られてしまっている。発掘は沿線46mを対象としてグリッドを設定して行った。

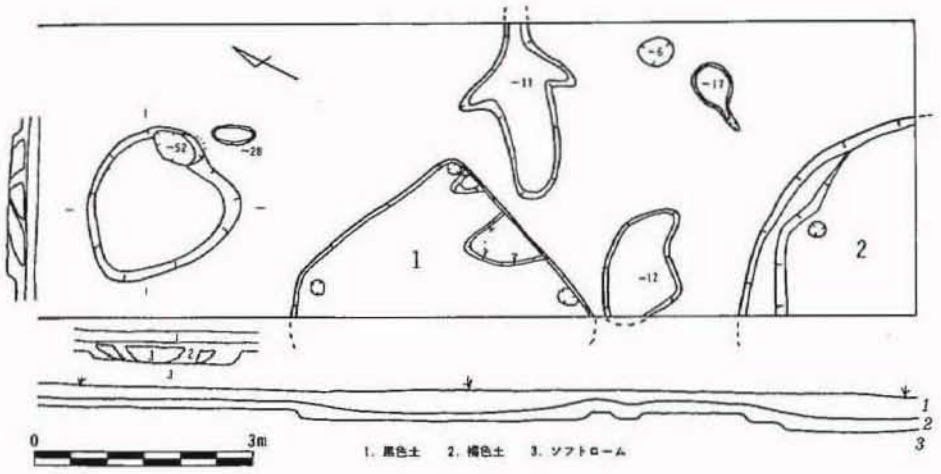
2　発掘の経過と遺構

発掘の結果，南東部の1～12グリッドでは，縄文後期初頭の住居址2軒と土坑およびいわゆるロームマウンド遺構を検出することができた。つづく13～20グリッドにかけては，基盤の軟質ロームに食込んで炭粒を多量に含む土層に遭遇し，凹凸する痕跡面がとらえられた。これに反し北西部では僅かに土坑を確認したに終った。

1号住居址は，一辺3mていどの隅丸方形プランを呈し主軸方向は南北で



第6図　小母沢遺跡（1：1000）



第7図　小母沢遺跡遺構主体部

あった。四隅の壁際には小さく浅い柱穴が穿たれている。ロームの壁高12cmと浅く床面は非常に凸凹としていて定まらず，東側は壁に接して不規則な低い段を有している。この規模では，西の用地界に炉址の一部が露われていいはずであるが，その気配は全く無かった。遺物は，打石斧と石鏃各1点，土器は注口部ほか4点のみであった。

2号住居址も1号址と同様なプランであろう。壁高13cmでさらに10cmほどの段差を有し，床面はやはり凸凹が著しい。遺物は磨石2点と土器片5点であった。東南部は構造改善工事による攪乱が及んでいたため，調査を見合わせた。

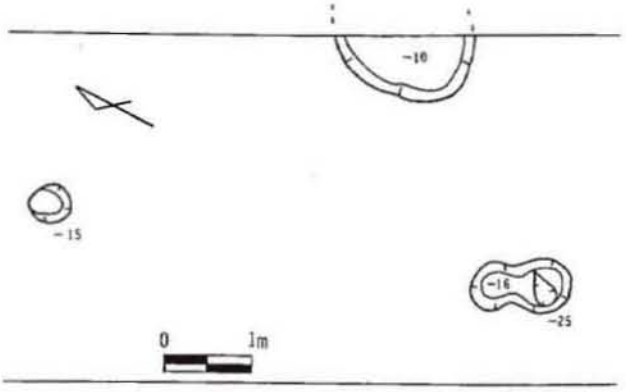
1，2号址に近接する4基の土坑は，どれも不定形で浅く，褐色土が堆積していた。このうち両住居址の間にはさまれた土坑の最上面から，黒曜石製の大型有柄の銛様石器が出土した。

1号址の北では，表土下20cmに軟質ロームが盛上った不整円形のマウンドが見出され，その周縁部に沿って褐色土の落込みが認められた。調査の結果，径2.1mのローム面下10～15cmに浅く掘られた土坑を基底とする，いわゆるロームマウンド遺構であることが分った。ただし，褐色土の間層はかなり乱れて不鮮明な状態であり，その判別に苦しめられた。マウンド直上から両耳把手の破片が発見されたほか遺物は無い。なお東接して小さなピットがある。

次に，13～20グリッドの範囲について述べてみよう。この地点の自然な層序では，平均15cmの耕作土（黒色土層）の下は13cm前後の褐色土層となって軟質なローム層に移行すべきところ，ここでは特異な状態がみられた。すなわち，褐色土層の下位は，径2～3mm長さ3～5mmほどの炭粒を多量に含む褐色の層が厚いところでは10cmに及んで認

められた。そしてこれを追跡すると，基盤である軟質ローム面はアバタのように凸凹して，径5～15cm，深さ5～12cm内外の不規則な凹みないし小穴が無数に刻まれていることが判明した。それらは全く無秩序であるが，炭混りの褐色土が食込んでいる点では一帯が等しく，木の根痕のような深いものはない。しかし他に手懸りはなく，20グリッドの含炭層直上から土師器の口縁破片2点が発見されただけである。

発掘区の北西部は，28～36グリッドの間で土坑と土師器片1点に硬砂岩の屑1片を認めたにすぎない。3つの土坑は浅く，黒褐色土が堆積していたこと以外特筆することがなかった。



第8図　小母沢遺跡北西部土坑

3　遺　　物

土器片のうち1～3は1号址，4～8は2号址出土のものである。1, 2, 6～8は粗雑な縄文の地文を大柄な曲線で区切って磨消している。4と5は曲線や微かに綾杉状の引掻痕をとどめて無文に近い。これらはゴロゴロした胎土に酸化鉄の粒子を含み，淡褐色を呈するきめの悪い土器片であり，後期初頭の井戸式に属する。ただし縦の条線と隆帯の懸垂文が認められる3は，溯って曽利II式に該当するので，周囲から紛れ込んだと思われる。

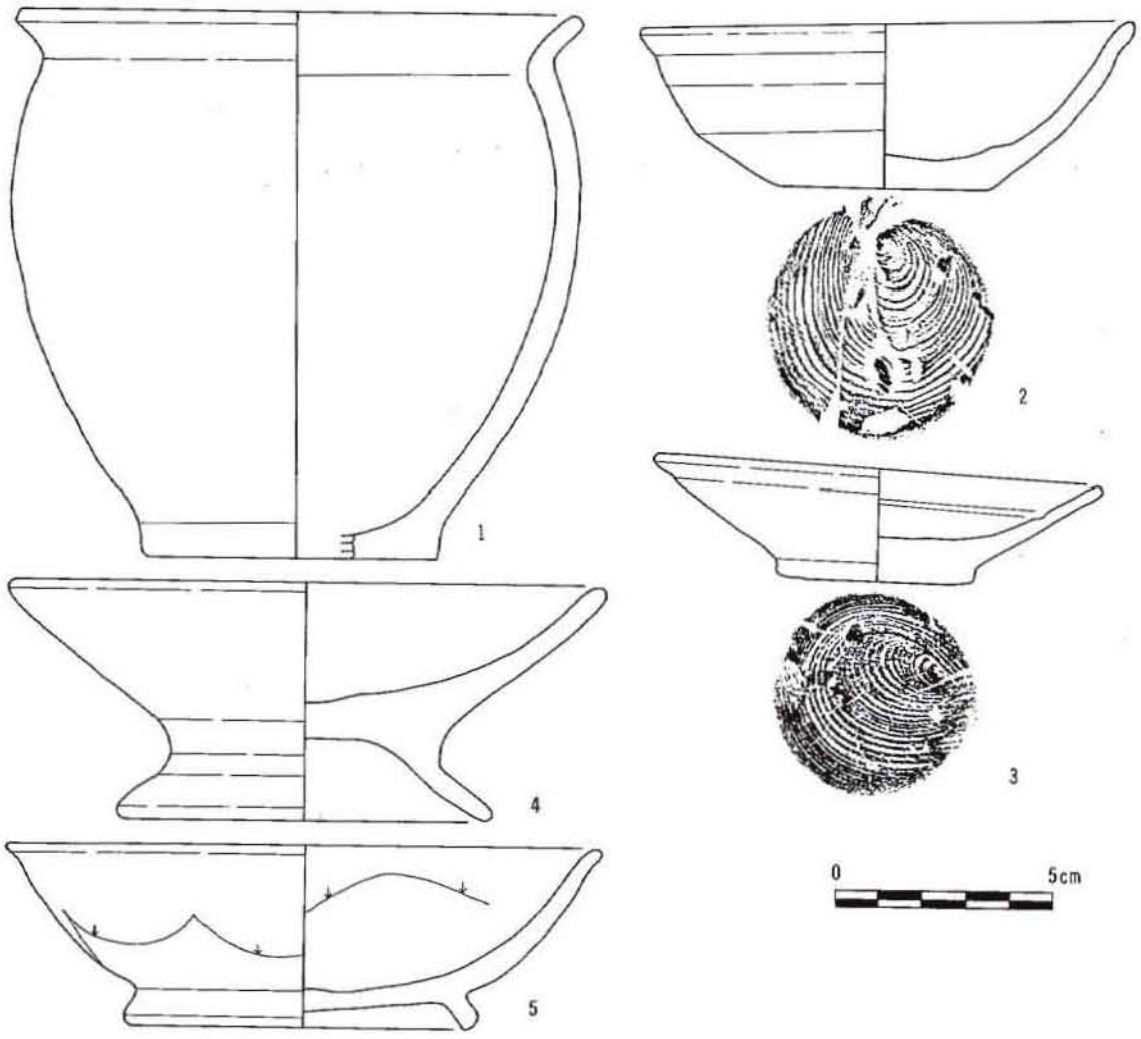
注口（9）は胴太で短かく，上側を吊って支持する形態と思われる。胎土・焼成は密でなく赤褐色を呈する。ロームマウンドから出土した10は両耳把手の破片であろう。

次に石器について述べると，1号址からは打石斧と石鏃が出土した。打石斧13は刃部を欠損して白く風化しているが，短冊形で片面に片理痕を残す砂岩ホルンフェルス製である。有柄石鏃11は，透明黒曜石製であるが欠失部側は厚くて剝離も大きいので，製作中の切損ではないかと観察される。

12は1, 2号址にはさまれた土坑の上面から出土した。最先端と舌部の先を欠くが左右の側縁に対称するキレット状剝離を施してある。大形の鏃とも槍先ともいいかねる尖頭器であって，あるいは銛のように使用されたのかもしれない。不透明黒曜石製。

14はわずかに嵌打痕を残して研磨された硬砂岩の磨石である。2号址の北壁上から出土した。15は輝石安山岩製の扁平な磨石である。焼土の付着がみられ火熱のために一部が崩れているが，両面とも手触りは滑かである。2号址出土。　　（小林公明）

第9図　小母沢遺跡出土土器拓影・石器実測図



第10図　平　安　時　代　の　遺　物

4　平安時代の遺物

本調査では遺構を確認するまでに至らなかったが，調査区の中央から北よりに土師器の破片が発見されている。また，発掘地点のすぐ北東の台地上には遺構があるらしく土師器・灰釉陶器片が発見されている。これらの中で図示できるもの5点を摘出して図示した。

10図1は土師器の甕形土器で，胎土中には，金雲母末を混入し焼成は普通である。底部には木葉痕が認められ内壁に炭化滓が付着する。10図2・3は土師器の坏形土器で，ロクロ整形である。2は糸切底で胎土は緻密であり内外面とも赤褐色を呈する。3も糸切底で内外面ともに赤褐色である。10図4は高台皿で，ロクロ整形のうえ焼成も一般的である。

10図5は灰釉陶器の坏形土器で，外反気味の付高台をした高台坏である。

以上が平安時代の遺物のおおまかな説明であるが，類例を町内に求めると手洗沢1号住居址の平安時代後期の資料があり，本資料もこれに類似した平安時代後期に帰属するものであると考えられる。　（平出一治）

5 結　び

今回の調査は，幅4mという極く限られた部分を発掘したにすぎないが，小母沢遺跡の興味ある性格の一端を明らかにすることができた。

発掘区の南東部でたがいに近接している一群の遺構は，一括して縄文後期初頭のものと考えていいだろう。しかもそれは，1，2号址の貧弱な構築ぶりから窺えるように，おそらく短時期の仮住い的な小集落と想定される。このような後期初頭の遺跡が，同じく小集落と目される中期最末の丸森遺跡と対峙しあっているのは注意に値しよう。また，いわゆるローム マウンド遺構については，当地方でも近年の発掘によって次々と発見されてきている。目下，縄文中期と平安後期とにあり，その様態は個々に異るが，基本的な構造は一致する。武藤雄六はこの遺構について「共同便所兼肥溜」説を提出している。※

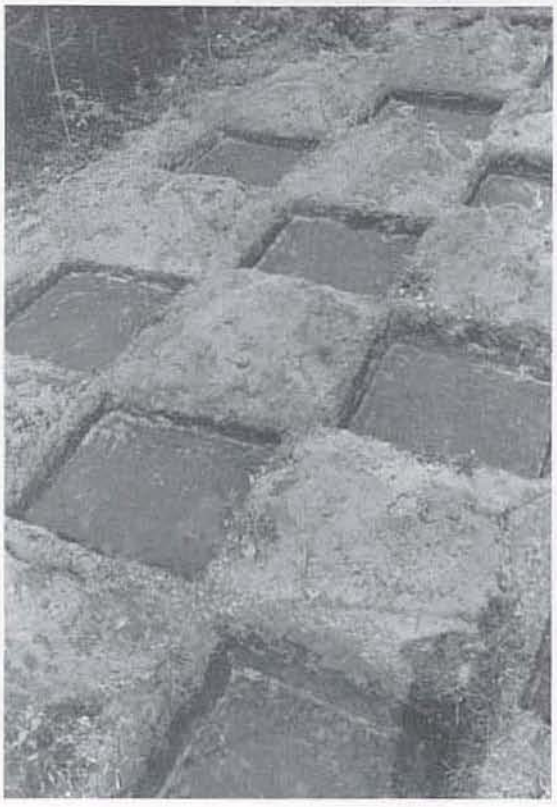
次に，13～20グリッドの遺構であるが，このような痕跡遺構とでもいうべきものを，意識的にとらえたのは当地方では初めてであり他にも例を聞かない。限られた発掘のため全体の在り方はつかめないが，発掘区の東西に廷びていることは確かであり，不整形に展開していると想像される。その時期については，決め手となる遺物が見当らないため何ともいい難い。しかし少くとも平安時代後期より降ることは考えられない。では，この痕跡遺構は何であろうか？様々な解釈が成立つだろうが，炭粒の起源を単に山火事のような自然現象に求めるのは，その平面的ひろがり及び混在状態からみて無理がある。結論的にいえば，これは人為の加えられた遺構であり，焼畑農耕のようなものの痕跡と考えた方がすっきりと説明がつく。このように軟質ローム面に遺された小穴や凸凹は，掘棒あるいは打石斧などをもってする球根類の掘採りや植付けによって刻まれるものが最も類似しているからである。

最後に，平安時代の遺構に関しては，すでに別の地点から発見されている遺物に加え，今回も若干の土師器片が出土したので，住居址をふくむ遺構が付近に存在することは確かである。あるいは，すでにその一部は古く鉄道開削の時に失われたかとも疑われるが，今後の調査に待ちたい。

（小林公明）

※武藤雄六「所謂ローム マウンドに挑む」山麓考古第3号 1975

発　掘　風　景



グリット発掘の状況

1 号 住 居 址

図版1　丸　森　遺　跡

発　掘　風　景

遺構主体部（手前が2号址）

図版2　小母沢遺跡

第1号住居址（凸凹がはげしい）

いわゆるロームマウンド遺構（カットとしたところ）

図版3　小母沢遺跡

13 グリッドの痕跡遺構

16 グリッドの痕跡遺構

図版 4　小 母 沢 遺 跡

丸森・小母沢遺跡発掘調査報告書

昭和50年11月1日

発行　富士見町教育委員会

国鉄岐阜工事局

印刷　株式会社中央印刷

（非売品）